

「池田の植木」——国際舞台で紹介



市と市内園芸農業関係諸団体が構成された池田市国際花と緑の博覧会出展協議会は、大阪・鶴見緑地で開かれている花の万博に「シェードガーデン・オアシス池田(木陰の庭)」を出展しています。アジアで初の国際園芸博覧会として、地場産業の振興と池田の植木を広く世界に知ってもらうのが目的です。

花博協会主催の「国際花と緑のコンテスト」で優秀賞を受賞した「シェードガーデン・オアシス池田」は連日、9千人を超える来場者でにぎわっています。

好評です 「木陰の庭」

「シェードガーデン・オアシス池田」が今回、AIPH(国際園芸家協会)基準の国際コンテストで、庭園の設計、滝部門でそれぞれ優秀賞、施工部門で金賞、芸術性部門で銀賞を受賞しました。

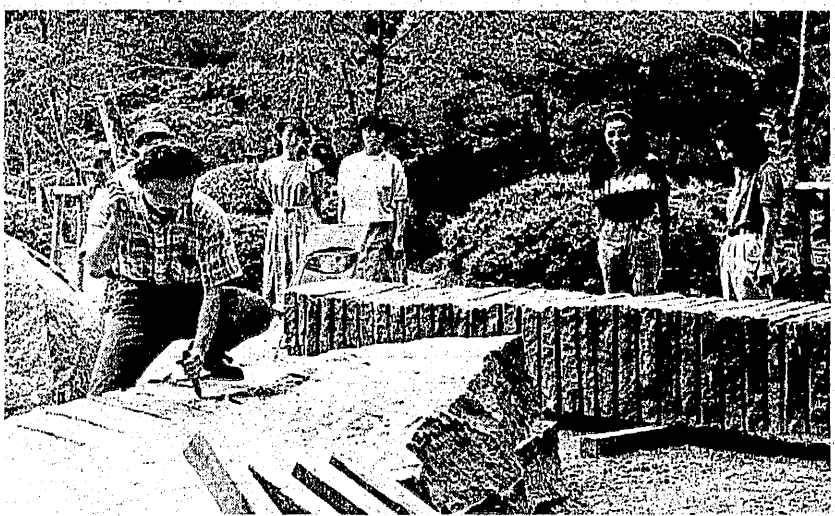
この庭園は、日陰を作るため、広さ約620平方メートルの庭園全体をネットで覆い、滝を主体とした構成になっています。杉板葺の「あずまや」正面から滝を望むと、豊かな水が高さ5メートル、幅9メートルの岩肌を流れ落ち、全期間を通して花と緑が庭園を彩るようになっていきます。花と緑は本市のシンボル・五月山、滝から流れ落ちる水は猪名川を表現しています。水が流れ、涼感あふれる「木

「木陰の庭」でお待ちしています



「木陰の庭」は、ひととき真夏の暑さを忘れる涼感を呼ぶ庭園です。あざやかな水が流れる音が庭園を涼しく感じさせます。ホノノリとくつろげるよう、笑顔でご案内します。

「シェードガーデン・オアシス池田」コンパニオン・岡田一恵



公開で作品づくり

——石の道・いけだ彫刻シンポジウム——

彫刻家が市民の前で、自らの作品を刻むというユニークな彫刻公開制作「石の道・いけだ彫刻シンポジウム」が7月11日、五月山公園・緑舞台で始まりました。府内などに住む5人の作家が8月31日まで、50日にわたる制作に取り組みます。

この催しに参加している彫刻家は小林陸一郎さん(箕面市)、道北英治さん(大阪市)、久保極さん(奈良市)、近持イオリさん(八幡市)、政義昌俊さん(松原市)の5人。市が委任した選考委員会の高橋亨・大阪芸術大学教授らが、石を使った作品を多く作っている実力ある作家として選ばれました。

この日午前10時から開かれた開会式では、5人の彫刻家を選んだ原石と完成予想のデッサンが公開されました。このあと、若生正市長、倉田薫市議会議長や参加作家らが原石にノミを入

れ、50日間のシンポジウムがスタートしました。

完成予想のデッサンは、自然石の形を生かしたもののほか、原石からは想像できないような作品もあり、完成が楽しみです。

5人の作家は8月末までのほとんど毎日、ドリルや研磨機などの電動工具、さらにはノミとハンマーなど、人力と工具を駆使、汗と粉じんにまみれながら、大きき約1立方メートルの能勢産黒みかげ石と格闘します。大きな石のかたまりが刻々と魂を吹き込まれ、芸術品に生まれ変わる過程に触れる絶好の機会です。

同シンポジウムは昨年に続いて2回目。制作のテーマは「彫刻のあるプロムナード」で、昨年の「街かど」とはひと味違った作品になるのではと興味を持たれます。制作された作品は、市内の公園や公共施設など、市民の憩いの場に設置します。

「池田市の日」には、本市の伝統行事「がんがら火祭り」の大型タイムツァが、パビリオンの間をぬうパレードコースを練り歩き、勇壮な炎の乱舞を世界の人々に披露しました。また、大阪府出展パビリオン「いちよう館」の「好きやねんブラザ」では、丹精込めて育てられた盆栽25鉢を展示、歴史と伝統を誇る池田の植木を紹介しました。

7月28日、花博会場で行った「池田市の日」には、本市の伝統行事「がんがら火祭り」の大型タイムツァが、パビリオンの間をぬうパレードコースを練り歩き、勇壮な炎の乱舞を世界の人々に披露しました。また、大阪府出展パビリオン「いちよう館」の「好きやねんブラザ」では、丹精込めて育てられた盆栽25鉢を展示、歴史と伝統を誇る池田の植木を紹介しました。

盆栽展示

池田の植木の歴史は古く、約450年前の天文年間(室町時代末期)までさかのぼるといわれています。山林用苗、桑苗づくりから始まって、しだいに植木栽培が盛んになりました。

承応2年(1653)、京の内裏が炎上して、紫宸殿(ししんでん)の左右にあった桜と橘(たちばな)が焼けました。枯れそうになった橘を、当時、池田在住の六蔵が接木で再生させ、ときの天皇から橘兵衛の名を賜りました。こうして、接木名人・六蔵の名とともに、池田の植木もさらに広く知れ渡りました。

延宝、天和(1673〜84)ごろには、多種多様な苗木、盆栽、花卉(かき)などを生産するようにになりました。特に木部のボタン栽培は有名で、文化、文政(1804〜30)ごろには、白ボタン、赤ボタンあわせ

450年の伝統誇る

池田の植木

て約300種類が栽培され、各地に愛好者が増え、高値で取引引きされていきました。このころの取り引き先は、東は江戸、能登、信濃、西は中国地方から日向の高鍋にまで及んでいたといわれます。

日露、第1次大戦を契機に、植木づくりは飛躍的な発展を遂げ、かきずかいぶき、五葉松などのいわゆる「背だれもの」、

観賞用植木の産地として知られるようになりました。

第2次大戦中はその影を消したものの、戦後は復興に努め、現在は細河地区を中心に約3000戸が植木栽培を続けています。

毎年4月、一般消費者を対象とした「植木まつり」が催されるほか、毎月8、18、28日には専門業者による植木市、春、秋には大市、また、毎年12月には、正月用盆栽専門の戎市(えびすいち)が開かれ、遠隔の地から訪れる人も多く、にぎわっています。

